

# 「お慈悲が心にしみる」

## 本堂が倒壊した寺院で報恩講

熊本地震から9カ月が経つ。本堂が倒壊した熊本県益城町の浄信寺（小田孝行住職）と専寿寺（高千穂義静住職）で報恩講が営まれた。浄土真宗で最も大切にされる「報恩講」のご縁を通して、門信徒や僧侶たちは親鸞聖人が阿彌陀如来の救いを伝えてくださったご恩をしみじみと味わった。

### ■浄信寺

本堂と鐘楼、山門が倒壊した浄信寺は1月16日から3日間、倒壊を免れた会館で御正忌報恩講を営んだ。法要開始30分前となる9時30分、更地となった本堂跡

地に鉄パイプ3本で吊るした喚鐘を、門徒総代の園田雄輔さん(70)が打ち鳴らした。「鐘がないとご法要の雰囲気にならないし、気持ちが悪くないからね」と話す。山里の静寂に響くその音に促され、続々と門信徒が集まってきた。入口で出迎える小田住職。久しぶりに寺を訪れた門信徒との挨拶に笑顔がこぼれた。法要が始まり、正信偈がとめられた。佐々木高彰さん(65)、同県山鹿市・常法寺住職)が法話した(写真)。昼食(お斎)は、門徒が持ち寄った野菜などを

### ■専寿寺

本堂、庫裏すべてが倒壊した同町・専寿寺は12月7、8日、同寺に隣接する集会所「まきやま座」で報恩講を営んだ。

机に打敷を掛け、地震で手が折れたままのお姿のご本尊を安置した。このご本尊は、4月14日(前震)の翌日、お見舞いのために訪れた熊本教区の農利信教務所長が、傾いた本堂に入って取り出した。16日の本震で本堂、庫裏が全壊。高千穂住職は「もしもあの時に救出していなかったら、ご本尊も失っていた。農所長に助けられた」と振り返る。

高千穂住職は「震災後、宗派を通じて多くのボランティアの方々に来てくださった。崩れた本堂や庫裏の片付けを手作業でしていただいた。重機ではできないことを丁寧にしてくださったおかげで、無理だったとおっしゃったご感謝でした。お軸を外し、多い日に



徒が集まってきた。入口で出迎える小田住職。久しぶりに寺を訪れた門信徒との挨拶に笑顔がこぼれた。法要が始まり、正信偈がとめられた。佐々木高彰さん(65)、同県山鹿市・常法寺住職)が法話した(写真)。昼食(お斎)は、門徒が持ち寄った野菜などを

熊本市東区から参拝した森本滋喜さん(88)は「やっぱりお寺でお話を聞くのはいい。阿彌陀さまのお慈悲が心にしみる。本堂が無くなり大変な時期だけど、法要に参ることができてよかった」と喜ぶ。御船町から参拝した西橋幸子さん(62)は「益城町の実家を取り壊さなければならなくなつた。悲しい中、こうしてお寺に来ると、馴染みの顔に会えて気持ちも楽になつた」と語る。